

ペン俳句会 句会報(三百六十二号)

令和六年十一月七日(木)

明治神宮吟行。囁目。投句三句、選句四句。

句会を、今年十月と同じ場所で開催。出席七名。

大津 そうかい

冬枯れの菖蒲田光あまねかり

柏手の響き良きかな今朝の秋

掃き終へし参道木の実うづたかし

松田 一文字

網の目の木漏れ日の陰天高し

大輪と懸崖並び菊花展

白秋や神の巨木の戦く音

宮原 凧

神宮の木々に囲まれ秋高し

秋の宮手水作法のフランス語

鳥居門奥へくと深む秋

志村 良知

薄紅葉清正井の底の澄み

時期の来て銀杏もみじのそれぞれに

彩りも名も華々し菊花展

長尾 進一郎

秋空を遮る巨木道暗し

東京の真中に森や秋日和

時流れ巨木の奇跡秋の宮

安藤 晃二

銀髪と尾花共々揺れてをり

神無月代々木の主も留守ならむ

清正井その静寂や冬に入る

西川 知世

奉納の銘酒葡萄酒秋高し

三の鳥居懸崖菊の大ぶりに

眼の蒼き人やカメヲや七五三

次回は令和六年十二月五日(木)、兼題は季語「熱爛」(大津そうかいさん出題)、席題は西川知世さん出題の「短」です。

季語を学ぶ 初学にかえって

西川 知世

十二月の兼題は「熱爛」となった。いかにも二次会好きのペン俳句といった題。さて、熱爛は何度くらいを言うのか：角川書店合本編歳時記では「酒を撰氏五〇度前後にあたためるのがよいといふ。寒い時は、七〇度にも八〇度にも熱して飲む。

熱爛である」と説明つばい数字を並べ定義する。講談社大歳時記では山本健吉が「寒さ凌ぎのため、とくに爛を利かした酒を言う。ふつうは銅壺や鉄瓶の熱湯に銚子をつけるが、銅や真鍮製の筒型の器で、注ぎ口と取っ手のある銚釐(ちろり)で温めることもある。」と解説をする。

季語の意としては、寒さを楽しむこだわりの爛酒で大人の楽しみみのよう。近頃では電子レンジでチンといった熱爛の句も飛び出し、季語の受難ではあるが、若者の挑戦はまだ実を結ばない。ある句会でウイスキーを熱爛でといった句が出た。確かに冬に飲むホットウイスキーは美味しいが、熱爛かで紛糾したことがあり面白かった。お湯で割るのがウイスキーで、薄めずに温めるのが爛をすることだと、こよなく酒を愛する人の酒論に軍配があがった。まだホットウイスキーは季語には採用されていないだろう。日本酒よりウイスキーと言う人たちがホットウイスキーで名句を作り諸先輩を説き伏せれば、冬の歳時記に取り上げられる日も近いかもしれない。増殖する季語である。

熱爛に焼きたる舌を出しけり

高浜虚子

熱爛や手酌いかしき二杯

久保田万太郎

熱爛を置くや指先耳に当て

吉屋信子

熱爛やいつも無口の独り客

鈴木真砂女

熱爛や性相反し相許し

景山筍吉

熱爛やガラス戸重き岬茶屋

添野光子

熱爛に応へて鳴くや腹の虫

日野草城

熱爛や余生躓くばかりなる

石原八束